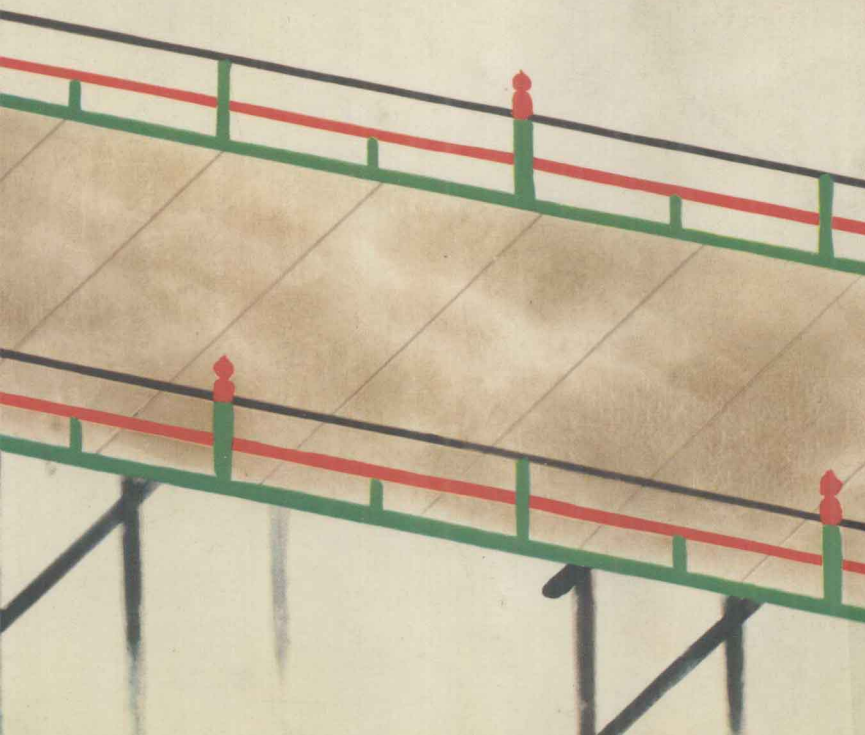




愛染灯笼

安西篤子



发 染 灯 籠

安
西
篤
子

講
談
社

あいぜんとうろう
愛染灯籠

定価九八〇円

著者 安西篤子

発行者 野間惟道

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一
〒一一二 振替東京八一三九三〇
電話東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

第一刷発行 昭和五十六年四月三十日

©安西篤子 昭和五十六年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。

目次

過去	5
衣更え	22
螢	36
縁談	51
留守居	70
牡丹亭	86
噂	103

その秋

125

懊^お悩^の

145

何処へ

163

別れ

183

高麗橋^{こうらいばし}

199

装幀・佐多芳郎

さし絵・川田清実

愛あい染ぜん灯とう籠ろう

過去

「なんといつても、こちらのお登与さまほど、気楽なお人はありますまい、ね、そうでしょ」

同意を求めるように、佐和は一座を見まわした。

「そうですとも」

すぐに応じたのは、弟嫁の妙だった。ほかの女たちも、眼で笑いながらうなずいている。

今年四歳になる末娘のよそを膝に抱いている登与は、娘の髪をなでていたが、黙って微笑した。

今日は雛の節句で、奥座敷に雛人形を飾り、親族の女たちを招いた。夫の正井宗味の姉はすでに後家になっており、使いを出したのだが、法事があるといって断つてきた。夫の叔母は生憎、病氣をしている。それで、結局、集まったのは、登与の母方の従姉の佐和と、弟嫁の妙、それに登与の妹二人と、妹の連れてきた友だちといった、若い女ばかりだった。

食膳に酒を少しつけたので、みな陽気になってしまっ

た。佐和はなかでいちばんの年嵩だが、「早く戻らなければ、うちは姑がやかましいのよ」と言いながら、すっかり腰を落ちつけている。

「とにかく、舅姑の苦勞をご存知ないだけでも、羨ましいわ」

妙の差す盃を受けながら、佐和はまたくり返した。

十二年前、登与がこの雲州松平出羽守家中御茶道頭正井宗味の家へ嫁いできたとき、夫の母はすでに他界していた。夫の父は夫が幼少時に亡くなった。後家となった母は女手一つで一男一女を育て上げ、息子の婚禮の直前に病死したのである。

会う度に佐和は、どんなに姑に苛められているかを訴えるのだが、気性のさばさばした女だったから、陰にこもらず、実際にはけっこううまく姑と折り合って暮らしているらしい。

どれほど従姉から羨ましがられても、登与には姑に仕えた経験がないから、自分がかくべつ幸運だとも思わない。「御祿はたくさん頂戴していращやるし、旦那さまはおやさしいし、可愛いお子は三人もおできになるし、ほんとお登与さまは果報ものね」

わざと指を折って言い立てる従姉の言葉を、なおも微笑を絶やさずに聴いていたが、登与はなんとなく気が重くなってきた。

従姉は小柄で愛嬌があり、年ごろになると降るように縁談があった。その中には、けっこう条件のいい縁もあった筈なのに、すべて断つて、みずから望んでいまの夫高橋多十郎に嫁いだのである。二人は幼馴染で、早くから想い合う仲だったという噂である。

暮らしが苦しいの姑が口やかましいのと、顔さえみればこぼすが、夫婦仲は睦まじく、苦勞を苦勞とも思わずに済んでゐるらしいのは、いつも陽気でつやつやした顔色をしている点からも察しられる。

従姉の佐和のおしゃべりは、子供のころから聞き馴れているから、ふだんはなんとも思わないが、こうしつこく、果報もののなのと言われると、あまりいい氣持はしない。

そればかりではない。弟嫁の妙までが傍から口を出した。

「やっぱり、お義姉さまはご器量がおよろしいから、良縁にも恵まれるのでしょうね」

「私がどうして器量などよいのですか。あなたぐらい美しければよかったのにと、いつも思っているくらいよ」

登与は少々、逆襲をこころみた。

じつさい、妙は器量自慢で、登与の弟の小林弥市郎やいちろうに輿入れして四人も子を儲け、そろそろ三十に手が届こうといういまでも、びっくりするような派手な色柄の小袖を着て

いる。

「ああら、私なんかだめですわ」

口では打ち消しながらも妙は嬉しそうな様子で、帯の間から扇子をとり出すと、酔いに染まった顔をあおいだ。

妙はあのことを知っているのだらうかと、いつの間にか登与は探るような眼を義妹に向けていた。

相手が妙と限らず、登与は親しく対座して話す誰彼に対して、ややもすれば同じ疑問を抱くことがある。

あのことが起こった当時、妙は登与よりまだ幼かった筈だから、誰も何事も耳に入れはしなかったらう。

しかし、その後はわからない。あの事件を知っている者が、こっそり教えたかも知れない。

「ほんとに、家でもいつも話していますのよ。お登与さまは、なんて運のいいお人なんでしょうって」

佐和の声に、登与ははっと我に返った。そして、たちまち耳まで真っ赤になった。

運のいい女、あんな忌わしい出来事に遭いながら、何事もなかったかのように、人格の高い正井家へもらわれてきて、安穩に暮らしている、人々はそう、評判しているのだろうか。

佐和はべつに腹黒い女ではない、殊更、嫌味やあてこすりを言うわけもない。そう打ち消してみるが、胸の波立ち

「かか様、おきぬさんが姉様人形の髪をこわしちゃったのよ」

次の間から、九つになる長女のくめが駆けこんできて、不満らしく口を尖らして告げた。

雛の節句というので、くめも今日は晴着を着せられている。佐和の連れてきた二人の娘といっしょに、次の間でまごごとをしていたのである。

「まあま、ごめんなさいね。おきぬはまだちいさいから、堪忍してやってね。おばさんがこんど来るとき、きれいなのを拵こしらえてきてあげましょう。さ、おきぬ、もうお暇しましょ」

登与に口をひらく間も与えず、佐和がそう言つて、腰をあげた。

佐和が立ち上がると、妙や、登与の妹の清とみつ、それにその友だちも、帰り仕度をはじめた。時刻は五時に近く、陽はよほど西に傾いている。

「あら、あなた方は、お義兄さまに会つていらつしやればいいのに。おっつけ、お城からお戻りでしよう」

清やみつに佐和が言うと、二人は肩をくねらせ、袂で口元を覆つて、くすくす笑つた。

正井宗味は今日は節句の御祝儀で登城しているが、夕刻には下ってくる筈である。

「いやあよ、お義兄さまにお眼にかかるのは」

十七歳になる清が言い、ひとつ年下のみつも、合槌を打った。

「なにもものをおっしゃらないんですもの。怖いばかりよ」

一同は、思わず吹き出した。

登与の実家の小林家からは、最前、若党が迎えにきて、中間部屋ちゅうかんへで待っている。

「お佐和さまは、喜助にお供させましょう」

登与は言つて、古くから正井家に仕えている中間を呼んだ。佐和が嫁している高橋家は、城の西、内堀の中にある正井家からは、城を隔てた反対側に当たり、普門院のまだ先になる。いまから女の足で、しかも子供連れて歩いて行けば、途中で薄暗くなつてしまふであらう。

「ご造作かけますわね。じゃ、おくめさん。さよなら。また家の方へも遊びにいらしてね。それまでに、姉様人形をたんと、拵えておきますからね」

まだ子供のくめにまで愛想をふりまいて、佐和は帰つて行った。清たちも一緒に辞し去った。

よそを抱いて、門まで彼女たちを見送つた登与は、軀の芯に疲れの溜まったような心持ちで、ぼんやりと座敷へ戻ってきた。女中の関が、せつせと立ち働いて、茶碗や菓子器などをとり片づけている。

客がきたときに灯した雛段の雪洞ぼんぼりは、まだ明かりを残し

ていて、障子をしめた薄暗い室内に、女雛男雛の金欄の衣裳とほの白い顔を浮き上がらせていた。

この内裏雛は、登与が生まれたとき、小林の祖母が京へあつらえてつくらせた品で、嫁入りのときに持参してきた。なかなか贅沢なつくりで、当時、親類の間で評判になったという。

子供のころ、登与はこの内裏雛をこよなく愛し、一年に一べんの出会いが待ち遠しかった。

しかし、近年は、むかしに変わらず無心にほほ笑み、仲よく並ぶ夫婦雛を眼にすると、なにやら胸が痛む。娘のくめやよそを喜ばせるためにだけ、飾るのである。今年もできるだけ早く片づけるつもりだった。

座敷をざつと掃くために、関が庭に面した障子をあけた。庭にはまだ、二、三日前に降った雪が消え残っており、冷たい風がざつと流れ入った。

登与の膝で遊んでいたよそは、乳母が夕飯を食べさせると言って、台所へ連れて行った。

くめは関の手で晴着を普段着に脱ぎかえさせられているらしく、納戸で声がする。

自分も着替えをしなければ、と思いながら、登与は先ほど、つきあいに呑んだ盃一、二杯の酒が、まだ軀のどこかに激んでいるようで、動くのも大儀だった。

夕闇の迫りはじめた庭を眺めながら坐っていると、「良

縁」「果報もの」と口々に言った従姉たちの声が、耳元でよみがえるように思われる。

しかし、登与は正井宗味との結婚など、少しも望んだおぼえはなかった。

登与は大番組に属して二十石五人扶持を頂戴する小林幸左衛門の長女に生まれた。二年後に長男弥市郎が誕生したが、姉弟の生母は産後の肥立ちが悪く、薬餌に親しむ身になってしまった。そして登与が五歳のときに亡くなった。

幸左衛門は十年近く独身を通したが、やがて世話をする人があつて、後添いを迎えた。それが清やみつを生んだ八重である。

弥市郎の妻の妙の言葉通り、登与は十人並以上のうまれつき、と言われた。色白で眼元・口元が優しい。幸左衛門は、母のない子と後ろ指さされぬよう、しつても厳しくしたので、行儀作法、読み書き、それに琴や茶の湯も、一通りは身につけた。

けれども、十七、八になっても、登与には縁談がなかった。

そのわけは、登与自身もよく知っていた。

実は登与が十六歳になった年の春に、ひとつ縁組の話が持ちこまれた。相手は三十七歳になる鰥夫で、十四を頭に六人の子があるという。幸左衛門もさすがに顔色を変えて、話を切り出した遠縁の老女を追い返してしまった。

家の者は登与には内密にしていたが、いつかそれが登与にも知れた。「私は人並の縁組を望むことはできないのだろうか」と考えると、さすがに心細くなった。

従姉の佐和の婚礼のあったのが、ちょうどその時分だった。祝言の晩、登与も手伝いに行ったが、想い合った同士の花嫁・花婿の、幸せらしい様子を眼のあたりにして、いっそう自分が惨めに思われた。

氣に染まぬ相手に添うくらいならば、死ぬまで、生まれた家の厄介者でいる方がまし、と思われた。しかし、二歳年下の弟弥市郎が元服し、お目見えも済ませると、ぼつぼつ縁談が起こるようになった。若い継母に、まだ幼い妹が二人と係累が多い上に、嫁に行かぬ姉までがいては、弟の結婚の障りとなるにちがいない。

継母の八重は氣のいい働き者で、自分といくらも年齢の違わない継娘を邪魔にする素振りは見せなかった。しかし、登与がいっまでも居坐っているのは、さぞ迷惑であろうと思われる。

登与が二十歳になった年の四月、桜の盛りのころ、北堀町に住む母方の伯父の家へ、花見に招かれた。

母が死んで暫くは、伯父も伯母も不憫がつて、しじゅう登与を呼び寄せ、小半日も遊ばせてくれた。同じ年ごろの姉妹がおり、いっしょに琴をさらったり、手習いなどもした。

しかし八重が後添いに入って以後は、遠慮するのか、つきあひもしいに疎遠になり、たまに法事の席で顔を合わせる程度だった。

それが、八重と二人、遊びにくるようになると誘われたので、登与はなんとなく奇妙に感じた。雪持柳に胡蝶をとばした仕立おろしの振袖を着せられ、継母に伴われて、登与は久しぶりに伯父の家の門をくぐった。

座敷へ通ってみると、先客があった。三十を幾歳か出たとみえる、がっしりとした体格の色の浅黒いかつい顔つきをした男である。入ってくる登与を、男は調べるような眼つきで一瞥した。登与はようやく、自分がなんのためにここへ招かれてきたかを覚った。と同時に、胸の鼓動が早くなった。子供のころから登与は、筋骨逞しい男の前で怯えるくせがある。

伯父の自慢の古木をはじめ、庭の桜樹は八分咲きというところで、雲か霞のようにむらがり咲き、ため息の出るほど美しい。この花の下で従妹たちと遊んだ楽しい記憶もあるが、今日の登与はそれどころではなかった。

膳部が出、盃がまわる。上座に坐った例の客正井宗昧を、伯父はひどく丁重にもてなしている。そのうちに伯母が登与に向かつて、琴を弾けと言いだした。

「ほんの座興じゃ。拙くともかまわぬ」
伯父までが口を添える。

むかし、よくいっしょに弾いた従妹は、先年、嫁入って、もうこの家にはいなかった。次の間に支度された琴の前に、登与はいやでも坐らぬわけにはいかなかった。

客はごく口数が寡く、登与の琴を聴いても、べつだん褒めるでもない。

はじめ一眼見たきり、あとはもう、登与には関心を抱いていないように思われた。伯父としきりに盃の遣り取りをしていたが、伯父があきらかになんか酩酊しているのに対して、宗味は膝も崩さなかった。よほどの酒豪とみえる。

継母の八重は気さくなたちで、初対面の相手とでもけっこううちとけておしゃべりをし、座持ちはうまい方なのだが、むつつりと押し黙っている宗味に対しては、とりつくしまがないらしく、手持ち無沙汰な様子で控えている。

伯母からいくらすすめられても、箸をとる気にもなれず、登与は末席にあつて、ひたすらうつむいたままだつた。見合いにまですんだのだから、父をはじめ双方の親族は、この縁組に異存がないのであらう。娘の方から断わるわけにはいかなかったので、登与はただ、自分が宗味の気に入らぬよう祈るほかなかった。

見合いの席における正井宗味の冷やかな態度から、登与は自分が相手の気に入らなかつたのではないかと、ひそかに心頼みにしていた。

登与の憶測を裏書きするように、その後、半月ばかり、正

井家からは音沙汰がなかった。

桜が散り尽して若葉が目立ち始める時分のある日、登与は明番で在宅する父幸左衛門に、奥の間へ呼ばれた。

この日の朝、伯父の使いの者が、宗味から託された扇を届けに来たという。縁組を承諾したしるしである。

「これで、わしも肩の荷が下りた」

父は近ごろになく上機嫌だった。

登与はじつと膝をみつめていて、顔をあげなかった。涙があとからあとから、膝にしたたり落ちる。

「なんじゃ、この縁組、気に入らぬと言うのか」

なかば狼狽し、なかば腹を立てて、父は語気を荒らげた。

「これほど結構な縁が、またとあると思うか」

それから氣をとり直した様子で、諄々と説きはじめた。

正井家は家格が高いばかりか、宗味は御茶道頭として屋形様（藩主綱近）のお氣に入りである。御祿もたくさん頂戴している上に、なにかと収入が多いと聞く。一人の姉はすでに嫁ぎ、あとは母がいるばかりで係累が寡いから、嫁入ったあとも氣楽でよからう。宗味の年齢も三十二歳で、登与と釣り合はぬほどではない。しかも妻を迎えるのは初めてである。

宗味がこの年齢まで定まる妻を持たなかつたのは、お城勤めが忙しく、つい年月がたつてしまったためという。近

ごろ宗味の母の健康が思わしくなく、「私の生きているうちに嫁を」と氣を揉むので、にわかに婚姻を思い立つらしい。御納戸役を勤める登与の伯父とは、お城でしじゅう顔が合い、そこから話が出て、見合いという運びになった。宗味の母の容態がいよいよよくないので、あちらではできるだけ早く祝言を済ませたいという。

「これでも不服があるか」

幸左衛門はまた頭ごなしに叱りつけた。

「不服は、ございませぬ」

指先で涙を拭い、蚊の鳴くような声で登与は答えた。

もとより不服の言えるような身の上ではない。それはよく承知している。父も口に出して言いこそしないものの、登与のような娘にとつて、これが望み得る最良の縁談だと思っているにちがいない。

あのいかつい顔つきの、冷たい眼をした男のもとへ嫁いで行くかと思うと、登与は心が重く沈む。

しかし一方、いつまでも生家にいられない身であることも知っている。弟の弥市郎もすでに十八歳になり、近く婚約がととのう筈だった。

その男の顔も風采も、登与の記憶にはほとんど残っていない。事件のあった当時も、父や親族の男たちがひどく怒って、「けしからん、討ち果たしてくれろ」と言い出し、幼い登与に犯人の人相・風体をしきりに問いただしたが、

五歳になったばかりの登与は怯えて泣くばかりで、手がかりになるようなことは、何一つ答えられなかった。

ちょうど登与の生母が亡くなった直後で、湯灌をするやら、葬式の準備にかかるやら、人々は忙しく走りまわっていた。子供は邪魔になるといいうので、登与は子守をつけて、外へ出された。春の終わりの季節の生あたたかい雨が あがったばかりの午後のことである。

前年の暮に在所から雇われてきたその子守女は、尻の軽い娘だったとみえて、たちまち近所の邸の小者といいい仲になった。この日も、登与を連れて家を出、ほど近い善光寺の境内で遊ばせるうち、たまたまこの小者の使いに出るのに行き逢った。

空は曇ったまま、はや暮れかけている。子守は登与を観音堂の階段に坐らせておいて、色男といっしょに御堂裏の木陰へ行き、ひそひそと立ち話をはじめた。

汚れた単衣の裾をからげた、その男が登与に近づいて抱き上げたのは、それからまもなくだった。男のふところは息が詰まるほど汗臭かった。大きな掌で口をふさがれて、登与は声もあげ得なかった。

登与の泣き声に、子守女が驚いて駆けつけたときには、着物がはだけて真っ白い腹をむき出しにした姿で、幼女は観音堂脇の暗がり立っていた。

おのれの過失に気づき、子守女は動転したらしい。相手

の小者と子ども、その場から逐電^{ちくでん}してしまった。

痛みと恐怖から泣きわめく登与を発見したのは、寺の番僧だった。このところよくみかけるので、寺でも登与がどこの家の娘か知っていた。すぐ小林家へ知らせが行き、迎える者がとんできた。

小林家では登与の父が先立ちになって、ひそかに犯人の探索にかかった。が、近ごろよくこの辺に出没していた、行きずりの無宿者であろう、と見当はついたものの、悪事を働いた奴がいつまでもぐずぐずしている筈もない。ついに相手の行方は判らなかつた。

もとより小林家では、登与の災難をひた隠しにした。けれども噂はたちまち広まつた。

この噂が生涯、登与につきまとい、将来、縁組の障りになることは、眼にみえていた。広くもない御城下のことで、交際相手も限られている。

いっそ、知^し返^へを頼^{たの}みて京・大坂へでも遣り、そこで嫁^{よめ}ぎ先をみつめるなり、身の立つ法を考えるなり、させようかと、登与の父も幾度か思案したが、妻が病弱で、ほとんど男手一つで育てた娘ではあり、遠方へ手放す決心が、容易につかなかつた。二十歳までふさわしい縁談に恵まれなかつたのも、全く、十五年前のこの事件が祟^{たたか}つたものである。

登与に越^{おちど}度がないとはいえ、忌^いむらしい事件に巻きこまれ

た娘に、世間の眼は冷かつた。

その登与に思いもよらぬ良縁が持ちこまれたというので、父の幸左衛門は一も二もなかつた。これで、眼ひき袖ひきうしろ指さした連中をも、見返すことができるというものである。

縁談の相手の正井宗味の人柄は、共に御次勤めとしてしじゅう顔を合わせる登与の伯父が保証している。

登与が涙をこぼしたのは、育った家を離れるのが心細いせいであろう。それとも娘らしい気後れであろうかと、幸左衛門は深く氣にとめもしなかつた。

伯父の話では、宗味は先年、春の草摘みに出た登与を見染め、妻を娶^とるならあの娘を、と心に思い決めたらしい。もとより悪い風聞のあることも承知している。母から嫁取りをすすめられたとき、「登与どのなら」と心のうちを打ち明け、宗味の母から登与の伯父に、仲立ちを頼む成り行きとなった。

「それほどに想ってくれる男に添えば、必ず幸せになろうぞ」

父からそう説かれても、登与の心は少しもはずんでこなかつた。娘の直感と言おうか、見合いの席での宗味のあの眼差しが、恋する男のものとは、どうしても受けとれない。それは、品物の良し悪しを調べるような、冷静でむしろ意地のわるい眼つきだった。

もしも宗味がほんとうに登与に愛情を抱き、ぜひにと望むのであれば、その気持が態度や表情に現われぬ筈はなからう。そういう風情が宗味にみられれば、登与としてもしぜんに彼に惹きつけられるにちがいない。男女の間とは、そうしたものではなからうか。

しかし、登与の胸中にはおかまいなく、縁組はすめられて行った。

まず、小奉書紙に家族の名を記した「由緒書」がとり交わされた。

ついで吉日を選び、正井家から結納が贈られた。仲人の伯父が縹色の袴・袴姿で、荷を持った中間を引き連れて現われた。小袖・帯・魚・櫓など、型通り玄関へ並べ、目錄を差し出す。小林家では品々を運び入れて座敷の床の間に飾る。幸左衛門が挨拶に出て、酒肴でもてなした。

祝言は五月、と決められた。ところが、息子の嫁が定まり、結納も済んで安心したものか、宗味の母の病状がにわかにあらたまり、四月の末に亡くなってしまったため、一応、婚礼は喪の明けるまで日延べされることとなった。

しかしながら、母を失った宗味が、家を取り締まるものもなく不自由しているというので、仲人と両家が話し合いの結果、披露は翌年にするとして、ひとまず仮祝言だけでも済ませるのがよい、とされた。暑い季節を避けて、秋九月に仮祝言がとり行われ、登与は正井家の人となった。

祝言の晩、白綾の地に幸菱を織り出した小袖に、練絹の被衣を着て、手をつけて父母に別れを告げたときの登与は、ため息の出るような美しさだったと、当夜、手伝いに来ていた従姉の佐和が、いまでも一つ話にする。

嫁き遅れたように言われていた登与だったが、小づくりで眼鼻立も愛らしいので、二十歳という年より若く見え、花嫁らしく初々しかったとは、親類の女たちの評言である。

仮祝言ということで行列も組まず、諸事省きがちに、盃事もあつさりとお済ませた。あいかわらず宗味は、他人事のようによそよそしい態度を変えない。

寢所へ引き取ると、夫の宗味はさつきと寢間着に着かえ、敷蒲団に胡座をかいて、蓑を吸いはじめた。

屏風のかげで登与も寢間着になり、寢床のそばへ戻ってきたが、宗味は声をかけるでもなく、外方を向いて蓑をのみ続けている。やがて煙管を荒々しく灰吹きにたたきつけたので、登与は胸がきゅっと痛むほどおどろかされた。

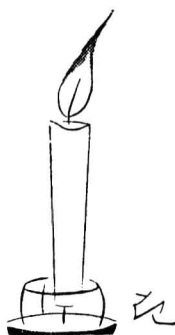
「断っておくことがある」

宗味が言った。

「わしが望んで、お前を娶ったわけではない」

登与は思わず宗味の顔を見た。

「よからぬ評判のあるお前を、妻にしたいなどとは、つゆ思わなんだ」



花嫁にひややかな一瞥をくれながら、宗味は火皿に新しく炭をつめた。

「では、なぜ、伯父に……」

かろうじて登与は訊き返した。

「すべて、母の計らいに過ぎぬ。わしと姉を女手一つで育てたわが母は、厳しい人柄で、また礼儀作法はもとより、家事万般、武芸・学問・遊芸まで、すべてに通じておられた。そのため、わしの嫁として母のめがねに適う娘が、容易にみつからぬ。とこうするうちに死期の近いことを覺つて、母は焦られたのであろうな。なにかの折にお前に眼をつけ、瑕疵はあるが、ああいう娘を貰うてやれば、恩に着てよく尽くすであらうとのお考えから、縁組を申し入れたと聞く。屋形様からお許しも出て、話がまとまった」

宗味はまた、灰吹きに煙管をうちつけた。

これで、見合いや婚儀の席での宗味の花婿らしからぬ態度も、腑に落ちた。

「病重いわが母の強^たつての願いとあつて、やむを得ずお前を迎えたが、どう評判されるかと思えば、はなはだ迷惑でならぬ」

苦虫を嚙みつぶしたような顔つきで、宗味は煙管をくわえている。

どうにかして泣くまいと、登与は齒を食いしばっていた。婚姻の初夜に、お前を妻にする気はなかった、と夫か